

氏名(本籍)	山田直子(東京都)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第111号
学位授与年月日	令和4年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本の子どもにおける多次元の資本と健康に関する研究 ：むし歯，肥満・痩身，精神的健康に着目して
審査員	主査 日本体育大学 教授 野井真吾 副査 日本体育大学 教授 鈴川一宏 副査 日本体育大学 教授 木村直人

### 《論文審査結果の要旨》

人の健康を維持するために必要な要因を資本とし，それを多次元でとらえた多次元の資本に関する研究では，人の経済的，文化的，社会関係の状況を健康の維持・増進のための資本と捉え，これらが生活習慣または健康と関連していることが報告されている．ところが，このような多次元の資本の日本の子どもの現状を限られたデータから確認してみると，必ずしも豊かとはいえない状況が浮かび上がっている．広く知られているように，経済的資本の指標である子どもの相対的貧困率は13.5%と，依然として10%を上回っている．また，文化的資本の指標と捉えることができる本の不読率（1ヵ月間で読んだ本の冊数が「0冊」と回答した子どもの割合）は，学年進行に伴ってその割合が増加し，高校生では35.7%以上に達する．さらに，家族や友人との関わりに費やす時間を社会関係的資本の指標と捉えると，OECD加盟国24か国の平均が週6時間であるのに対して，日本の子どもは週2時間と群を抜いて短く，2000年代に入るまではどの年齢層でも増加していた休養・くつろぎおよび趣味・娯楽の時間は，その後10～14歳でそれぞれ4分，5分の減少に転じている．

このような状況を踏まえて，本学位論文では，多次元の資本と健康との関係を明らかにし，子どもの健康問題解決のための方策を検討することを目的に，第1章では既存の社会調査資料の二次分析により家庭の多次元の状況と子どもの健康との関連(研究課題1)が，第2章ではフィールド調査により日本の中学生の多次元の資本と精神的健康との関連(研究課題2)がそれぞれ検討された．各章の概要は，以下の通りである．

第1章(研究課題1)では，都道府県別に公表されている社会調査資料の二次分析により，家庭の経済，文化，社会関係，時間的資本(以下，「多次元の資本」と略す)と子どものむし歯，肥満，痩身の状況(以下，「健康状況」と略す)との関連が検討された．このうち，多次元の資本は『社会生活統計指標－都道府県の指標2020』から，貯蓄および生活保護(経済的資本)，スポーツおよび旅行・行楽(文化的資本)，ボランティアおよび離婚(社会関係的資本)，労働時間[男]および労働時間[女](時間的資本)のデータを使用した．同様に，健康状況は『平成27年度学校保健統計調査報告書』から男女6～17歳におけるむし歯罹患率，肥満傾向児出現率，痩身傾向児出現率のデータを使用した．分析では，各データの範囲を確認後，

多次元資本および年齢（調整因子）を説明変数、健康状況を目的変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、むし歯被患率の都道府県格差が確認されるとともに、むし歯被患率および肥満傾向児出現率に対する家庭の経済、文化、社会関係、時間的資本との関連も確認された。そのため、子どものむし歯、肥満の改善には、家庭の多次元資本に注目したアプローチの必要性が示唆された。

第2章（研究課題2）では、東京および神奈川の公立中学校3校に在籍する中学1～3年生744名から得られたデータを基に、多次元資本、生活習慣、精神的健康の関連が検討された。調査は、多次元資本（経済的資本、文化的資本、社会関係の資本、時間的資本）、生活習慣（睡眠問題、運動習慣、食品群別摂取頻度）、精神的健康（GHQ-12）の質問項目で構成される質問票を用いて実施された。分析では、データに欠損がなかった542名（男子275名、女子267名）分のデータを用いて、多次元資本→生活習慣→精神的健康を想定した仮説モデルが共分散構造分析によって検証された。その結果、仮説モデルは採択可能（GFI=0.909, AGFI=0.902, RMSEA=0.033, AIC=915.117）であり、多次元資本（とりわけ、社会関係の資本、時間的資本）が生活習慣を介して精神的健康に関連する可能性が確認された。そのため、中学生が抱える精神的健康の解決には、多次元資本（とりわけ、社会関係の資本、時間的資本）へのアプローチが有用である可能性が示唆された。

これら各章での研究知見を踏まえて、本学位論文では、「子どもの健康課題の背景には、資本の問題が存在するとともに、子どもの健康問題の解決には、経済、文化、社会関係、時間といった多次元資本に注目したアプローチが必要である」ことが提案された。

審査では、本学位論文が日本の子どもの健康課題の解決に向けて重要な研究知見を提供しているだけでなく、先行研究では十分に意識されてこなかった時間的資本も含めた「多次元資本」に真摯に向き合っていること、これまで十分に活用されてきたとはいえない二次分析の手法に果敢に挑んでいること等が高く評価された。また、第2章で取り組んだ教育現場でのフィールド調査には、調査校や対象者との信頼関係が不可欠である。その点、教育現場と連携を取りながら、調査を企画、実行し、得られた研究知見を学術論文にまとめ上げるとともに、調査校にもその成果をフィードバックするという一連の作業は、申請者が自らの力で研究を立案、遂行、解析、解釈、公表するという研究者としての力量を十分に兼ね備えている証であることも確認された。その他、研究題目、問題意識、結論については、審査員の指摘を踏まえて加筆、修正する必要性が確認された一方で、全般的には各審査員の質疑に対して、的確かつ真摯に応答する様子が確認できた。

以上のことから、審査員全員の一致を持って、山田直子氏が博士（体育科学）の学位を授与されるに十分な学力と見識を有しているとの判断に至った。

## 《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

2022年1月14日